未完長篇「夢の輪」 参考資料一覧

＊要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

No.	タイトル	著者	書名（出版社）	初出年/月	頁数	要旨
0	「夢の輪」初出と書誌	ー	福永武彦全集　第12巻 （新潮社）	ー		・初出：「婦人之友」昭和35年（1960）10月号、昭和36年（1961）1月号より12月号まで連載（13回）、及び『自由』昭和38年（1963年）5月号、題名「或る愛」（序章）。 ・単行 「夢の輪」初版。昭和56年12月槐書房刊。限定320部、うちA版70部、B版250部。四六版、A版は総皮装、B版は背皮、マーブル紙装、布製夫婦箱入。題簽(せん)著者、装幀者名なし。本文295頁。内容：「夢の輪」一篇、及び「あとがきに代えて」（源高根）。
1	「夢の輪」連載最終回付記 「作者から」	福永武彦	「婦人之友」1961年12月号	1961/12		約束の一年が過ぎましたので、ひとまずここまでにします。作者が少し間口をひろげすぎたので、中心部に入るどころかまるで発端のうちに終ってしまって、読者の皆さんには申訳ありません。たしかに作者の不手際ですが、章ごとに別々の人物を書いて、なるべく各章が独立した形を取るようにしたい、その書きかたが読者の皆さんにも読みやすいのではないかと目論んだものですが、ついこういうことになりました。その点を深くお詫びします。
2	「心の中を流れる河」新版後記	福永武彦	「心の中を流れる河」新版 福永武彦全集（新潮社）　第4巻に所収	1969/7	2 （全集）	私が（再版に）気の進まなかった原因の一つは、この中に含まれている中篇「心の中を流れる河」を、出来ることなら目録から削り取ってしまいたいと思っていたからである。というのはこの作品に自信がないという意味ではない。この中篇の素材をもう一度解きほぐして、私は「 夢の輪」という長篇を構想し、既にその第一部は昭和35年から36年にかけて或る雑誌に連載した。最初に中篇として書いたものとは、筋も主題もやや違うもので、ただ主要な登場人物が重なり合っている。そして私は長篇の第二部以下をこの後書き継ぐつもりだから、最初の中篇を人目に曝さない方が、作者の手の内が見すかされないで済むだろうというふうに考えた。（引用）
3	「小説の発想と定着」 菅野昭正との対談	福永武彦	「国文学」昭和47年11月号 福永武彦対談集「小説の愉しみ」（1981）所収	1972/11		福永：しかけた仕事で残っているのは、さっきの「独身者」はちょっと別にして、小説では、「夢の輪」というのが残っている。（中略） 「夢の輪」というのは第一部だけできあがって、本にしないでいるのですけれど、もう、10年もたってますから、その第二部と第三部とを書こうと思うのです。第三部は第一部の続きですからノートもあるし、大体の見当はついていますが、第二部というのを、別の人物の視点から、まったく別なふうに、内的独白で書こうと思っているものですから、これはノート、皆無ですね。それで、ますます、なんというかな、わがままに、かつ、勝手な小説を書きたいという気になって、こんどはそういう方向で、変なものを書くつもりなのですよ。

4	「文学と遊びと」 清水徹との対談	福永武彦	「解釈と鑑賞」昭和52年7月号 福永武彦対談集「小説の愉しみ」(1981)所収	1977/7		福永:「心の中を流れる河」という短篇を書いて、それは大変気に入っている作品なもんですから、あの頃は僕は長篇の申し込みがなかったもんで、結局その材料を中篇に書いちゃったけれど、どうしてももっとたくさん書きたいので、それを解体して、つまり「心の中を流れる河」を消してしまって、その代り新しく同じ人物を使って別の作品を書くという発想のもとに書き出したら連載が1年経っちゃったんで打ち切られたんで、結局中途半端で終わったわけですね。最初の計画だとそれのまだ倍ぐらいあるもんですから。それを書こうと思っているんだけれどもちっとも書けなくて・・・・・・。 つまりあれはね、チャプターごとに人の名前がつくんですよ。一章、梶田梢とか、二章、梶田信治とかいうふうに、つまりどの章ももちろん三人称で書いてあるけども、その人物の目で書くわけです、人物はわりと沢山いましてね。 牧師さんが出てきて、牧師さんの奥さんが出てきて、奥さんの妹がでてきて、それからその妹の亭主が出てきて、もう一人恋人が出てきて、それからその亭主の姉さんが出てきて、というふうに広がっていきましてね、それはだんだん輪になっていくんですけどね、それが要するにひとあたりぐるぐるまわったところで終っちゃったんですね。ひとわたりまわったところで、またもう一遍ぐるっとまわして、そこまで寂代という名前の都市の事件を書いておいて、それから今度は東京へ持ってきて、東京に人物をひき移してまた書くつもりでいましたね。おまけにあれは、戦争の終わった敗戦の次の年かなんかですからね。要するに、もっと昔書いておくべきだった作品なんですよ。ますます時間が経っていくでしょう。ですから、敗戦の次の年なんていう、そういう風俗的なものを全然度外視して書ける作品じゃないですからね。 牧師の奥さんの妹っていいましたが、その妹が女主人公だけど、それにまた妹がいましてね、これを東京から寂代へ行かせたんです。そこで終わっているんですが、今のところ。行かせた人物をまた動かさなけりゃならないから、それをその人物のモノローグかなんかで短い第二部を作って、それからまた同じような客観描写で第三部にしようかなと、計画だけはちゃんとしているんですけどね。終わりも大体きまっているんですけどね。 (これから書く小説について訊かれて) 福永:『夢の輪』と『山のちから』とそれからもう近々書き出すはずの長篇と、三つ、どれからやろうかってことで、それにしちゃ気力ないでしょう、からだの調子が悪くて(笑)。どうも困っているところ。
5	「 フォークナーと私」	福永武彦	「ウィリアム・フォークナー」2巻1号(南雲堂) 福永武彦全集(新潮社) 第18巻に所収	1979/6	6 (全集)	「ヨクナパトーファ」という架空の舞台を設定したことは、しかもその舞台に同じ人物を繰り返し登場させることは、フォークナーの甚だ魅力的な特徴である。(中略) 1956年に、「心の中を流れる河」という中篇の中に、北海道の奥地に寂代という町を設定し、それよりも更に奥地に、弥果という町をもつくった。私はこの舞台が気に入ったので、その3年後に「世界の終り」という中篇でも同じ舞台を用いた。(中略) その2年後に私は「夢の輪」という長篇を雑誌に連載し、「心の中を流れる河」と同じ舞台に同じ人物たちを登場させて、別の小説を書こうとした。もしもその小説が完結していたら、私は私の寂代物をもっと書いたかもしれない。私はしばしば「ヨクナパトーファ」を羨望し、寂代や弥果に私の人物たちがさ迷う場面を空想するが、それに作品として形を与えることは未だに出来ないでいる。恐らくフォークナーが、そのモデルである土地を、そこに生まれ住んだことで熟知していたのに対して、私は北海道にわずか足掛け3年しかいたことがなく、土地はただ浪漫的な印象を与えたにとどまる、という相違があったためであろう。(引用)

2. 単行本

No.	タイトル	著者	書名・出版社	初出年/月	頁数	要旨
1	「夢の輪」 あとがきに代えて —「夢の輪」のあとさき—	源高根	「夢の輪」(1981)槐書房	1981	8	「夢の輪」は、長篇小説としては「風土」「草の花」と「忘却の河」のあいだに位置する作品で、「婦人之友」の需めに応じて昭和35年夏に信濃追分で書き始められた。(中略) 「幼年」がそうであったように、「それはどうしても書かなければならない作品の一つに属していた」と私は思う。事実いつのころであったか、「夢の輪」の続稿を「新潮」に連載するという話のついでに、全体の構想を聞いたこともある。しかし「死の島」が完結した後の福永先生は、病床に在ることの方が多かった。機は熟していたのに宿痾がその実現を阻んだ。 福永先生が東京を離れて北海道帯広市に滞在されたのは、終戦の年の昭和20年4月から9月までと、21年4月から翌年10月までの二度である。(中略) したがって北海道で暮した期間は通算して20ヶ月あまり、酷寒の帯広を経験されたのはひと冬に過ぎないけれども、そこでの生活は福永先生の心身に深い辛労を強いるものであったかのようである。 私はこの長篇小説の創作ノオトに「夢の輪　或は死に至る病」という総題が書かれていたのを思い出すと、「夢の輪」が「世界の終り」と同じ地平に連なる作品であったかもしれないという想像を棄てることは出来ないのである。(引用)
2	心の音「心の中を流れる河	首藤基澄	福永武彦・魂の音楽(おうふう) 第5章　心の音「心の中を流れる河」	1996/10	9 (第5章)	「心の中を流れる河」は、誠実で小心な門間牧師が、「かすかな物音」を聞くところから始まり、寂代の河の音を聞く梢の生の寂しさを表現するところで終る。主人公を章ごとに変えながら、それぞれの内部を照射することによって、心の音を聞くのである。そこでは、現実の猥雑さはきれいに除去され、一つの秩序が与えられている。 河の音を魂の音楽の象徴とすれば、寂代河は梢の寂しさの象徴であり、ひいては福永の生の象徴とみてもいい。「氷の混った水が流れていて、あの音を聞いていると身体中が寒くなる。」という寂代河と同様に、一度は魂の凍りつくような体験をした人物の魂の律動がそこから伝わってくる。(引用)

3. 大学研究紀要、その他研究録

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	頁数	要旨
1	書きなおす人・福永武彦「心の中を流れる河」と『夢の輪』	小林一郎	「文藝空間」第10号 総特集＝福永武彦の「 中期」	1996/8	14	・「心の中を流れる河」について 本篇は、宗教に帰依している者よりもそうでない者のほうが救いを必要としているという主題の短篇だ。（中略） 小説の書法はこの時期の福永にしては比較的おとなしく、かねてからの内的独白は洗練された。だが、人物・視点のロンド的な方法に比較して主題の展開は充分とは言えない。終結は抒情的に定着されているが、これは主題にこめられた苦味を軽減するための作者のサービスではなかろうか。余韻と言えば聞こえは良いが、テーマからすればもう少し膨らませても良かった。続篇を期待すると言っても同じだ。この不完全燃焼が同じ素材を用いた別の長篇小説を要求することになった、というのが福永がこれを中篇と呼んだ背景ではなかろうか。（引用） ・「夢の輪」の中断について 「間口をひろげ」る試みの、ある種の拡散性がまだうまく機能していない、それを福永も自覚していたのではないか。間口をひろげたと言えば、中期の福永は八面六臂の活躍ぶりで・・・（中略） しかしそれら、外的な執筆状況が福永の小説の本質を決定するわけではない。彼の小説観がそれを決定するのである。（中略） おそらく第三部の結末まで書かれたこの作品こそ、福永が予定していた次のサイクルにつながる「第二部」そのものになったであろうに、福永の「内部の批評家が、その作品の価値を納得しなかった」のである。
2	福永武彦 「心の中を流れる河」	黒岩浩美	「成蹊国文」第31巻	1998/3	9	本稿は、主人公梶田梢の心の有りように焦点を当て、「河」の意味とともに、梢の心の問題を中心にそのテーマについて考察している。以下は引用。 「心の中を流れる河」で福永は梢の孤独な心の深淵を真冬の寂代河の風景に重ねて映し出した。この作品における河のイメージは、厳しくはあるが生命力ある力強い河である。河は流れ続けやがて、海へたどり着く。梢はその河の音に一人耳を傾け、自分の心と向き合う。そのことは彼女が今、生存の根源的な問いかけを外に向けるのではなく、自己に向け始めたといえるのではないだろうか。 「心の中を流れる河」という作品は現実の問題の中から神を信じることを求める梢の姿を、十分とは言えないが牧師を対置させて描き出した作品であるといえる。
3	『夢の輪』と「 心の中を流れる河」の間 ― 福永武彦のキリスト教意識についての一考察――	近藤圭一	「聖徳大学研究紀要」（人文学部）第16巻	2005/12	8	本稿は、「夢の輪」と「心の中を流れる河」との対比について、特にキリスト教意識の面から考察を加えている。以下は引用。 「心の中を流れる河」は信仰の限界を描こうとしたもので、ペテロくらいの信仰がないならば、「弱い」自分を「 ぬるま湯」信仰で「あったまって」生かしていくよりも、苦しみながらも己の「心の音」を聞きながら強く生きていくことの方がよいという作者の姿勢が出ている作品なのだろう。（中略） 『夢の輪』が『独身者』の挫折を乗り越えようとして考案されたことは、作ろうとした意図、外見的構成を規定した。しかし、そこに盛り込もうとしたものはまさしく「人間」の物語である。『独身者』から『草の花』、そして「心の中を流れる河」まで、姿を次第に変えながら続いてきた、神と対話する人間を描こうとするのではなく、単なる人だけの世界を描こうとしたのである。そのためにキリスト教意識を引きずってきた「心の中を流れる河」は「抹殺」されなければならなかった。それは、神との距離で苦しんできた福永にある結論をもたらした。彼の文学には以後この種の神学論争が見られなくなったのである。